

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿 + 源氏解説

連載第 59 回 第 11.4.5 節～第 11.4.7.2 節

2020 年 6 月 1 日

小 田 勝

358 頁「11.4.5 疊語」。次例は形容動詞語幹の疊語形である。

- ・この入道殿下 (= 道長) の御一門よりこそ太皇太后宮・皇太后宮・中宮三所出でおはしましたれば、まことに希有々々の御幸ひなり。(大鏡)

359 頁用例 (13) の類例をあげる。

- ・泊まりつつ駅 駅と思ふ間に行けど尽きせぬ道の長浜 (大式高遠集)

次のような疊語は「…ずつ」の意か。

- ・春のもてあそび (= 春 = 鑑賞スル木草ダケヲ) わざとは植ゑで、秋の前栽をばむらむら (= 一群ズツ) ほのかに混ぜたり。(源・少女)

また、疊語が「それぞれ異なった…」の意を作ることがある。

- ・母方からこそ、帝の御子も際々に (= ソレゾレ異ナッタ身分デ) おはすめれ。(源・薄雲)

なお、「秋の田の仮庵の庵の苔を荒み」(百 1) のように、同意の別語を接続させる表現を「接続剩語」という。少し、例をあげておこう。

- ・[守ノ館ヨリ] 呼ばれて到りて日一日、夜一夜、とかく遊ぶやうにて明けにけり。(土佐)
- ・生きての世死にての後の後の世も羽を交はせる鳥となりなん (玉葉 1555)
- ・神無月時雨の雨の降るたびに色々になる鈴鹿山かな (金葉 260)
- ・常なきの常なき世にはあはれてふことよりほかにことのなきかな (範永集)
- ・岩間漏る石間の水の音までも秋はあはれと聞きぞなさる (中務内侍日記)

360 頁「11.4.7.1 名詞の並置」。用例 (4) (5) は、現代語の「冷暖房・乳幼児・政財界」のような類で、「略熟語」などと呼ばれることがある。次例は「春の宮 (= 春宮)」と「秋の宮 (= 中宮)」の意、

- ・春秋の宮の使ひももろともに花めき尽きむ賀茂の御祭 (為忠家後度百首)

次例は「南面・東面」の意、

- ・[道長ハ女房達ヲ] 南・東面に出ださせ給うて (紫日記)

次例は「正月・五月・九月」の意、

- ・後高倉法皇は持明院殿の御堂の御所にて、正五九月に必ず御講あり。(文机談)

次例は「姫君に琵琶 [の御琴]、若君に箏の御琴を」の意である。

- ・姫君に琵琶、若君に箏の御琴を(源・橋姫)

同頁用例(6)(7)の類例をあげる。

- ・その夜、雨風、岩も動くばかり降りふぶきて(更級)
- ・春秋の霞にも霧にも劣らぬころほひなり。(紫式部集・詞書)

361 頁「11.4.7.2 並立を表す助詞」。ここでも、いくつかの類例をあげておく。用例(1)～(4)の類例、

- ・年ごとに鏡のかげに見ゆる雪と波とを嘆き(古今・序)
- ・その柱と屏風とのもとに寄りて、我が後ろよりみそかに見よ。(枕100)
- ・盗人、死人の着たる衣と、姫の着たる衣と、抜き取りてある髪とを奪ひ取りて下り走りて逃げて去りにけり。(今昔29-18)
- ・とる方なく口惜しき際と、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、数等しくこそ侍らめ。(源・帚木)
- ・[近江君ハ]愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなるを、額のいと近やかなると、声のあはつけさとに損なはれたるなめり。(源・常夏)

用例(5)(6)の類例、

- ・誦経(=ココデハ布施ノ意)うちし、あはれげなる法師ばらに、帷子や布やなどさまさまに配り散らして(蜻蛉)
- ・破子や何やと、ふさに(=タクサン)あり。(蜻蛉)
- ・[一条帝ガ父円融院ニ行幸ナサリ]院の御方には、帝の御贈り物や宮の御贈り物やなど、さまさまにせさせ給へり。(栄花3)

用例(7)～(15)の類例。

- ・いたう進みぬる(=優レタ)人の、命ゆ、幸ひと並びぬる[人]は、いとかたきものになむ。(源・絵合)
- ・殿よりぞ、綾ゆ、何くれと奉れ給へる。(源・玉鬘)

[前回(第58回)の「源氏解説 桐壺(3)」の訂正]141頁4行目の訳文「しっかりした後ろ盾がないので」は、『湖月抄』の原文は「御うしろみ」なので、「御後ろ盾」とすべきでした。

\*\*\*\*\*

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（4）

（増註版 7 頁、  
新全集 19 頁）皇女たちなどもいらっしゃるので<sup>①</sup>、（帝は）この御方のお諫めだけは、やはり煩わしく、（また一方で）お気の毒であると<sup>②</sup>お思い申し上げなさるのだった。（更衣は）畏れ多い帝の御庇護をお頼り申し上げながらも<sup>③</sup>、蔑み、欠点を探しなさる方は多く、ご自身はか弱く、何となく頼りない様子で、かえって気苦勞をなさる<sup>④</sup>。（この更衣の）お部屋は桐壺である。（帝が）多くのお妃方（のお部屋の前）をす通りなさりながら<sup>⑤</sup>、ひっきりなしの（桐壺への）お渡りに<sup>⑥</sup>、お妃方がお気をもみなさるのも、なるほどもつともだと思われた。（更衣が帝の御座所へ）参上なさる場合にも、あまり度重なる折々には、打橋・渡殿・あちこちの通り道に、けしからぬことを度々して、御送り迎への侍女の着物の裾が堪えられないくらい、とんでもないことがある。またある時には、どうしても通らなければならない馬道の戸を閉ざして中にとじ込め<sup>⑦</sup>、こちら側とあちら側とで示し合わせて、きまりの悪い思いをさせ、困らせなさる時も多い。何かにつけて、数えきれないほど苦しいことが増えていくばかりなので、たいそうひどく思い悩んでいるのを、

（注）①この巻の後文に「女御子たち二所、この御腹におはしませど」（新全集 39 頁）とある。 ②「こゝは弘徽殿のおぼすところを、きのどくにおぼしめす也」（玉の小櫛）による。 ③「かしこき御かげをば頼み聞こえながら」は「なかなかなるもの思ひをぞし給ふ」に係る。 ④「なかなかなる（＝なかなか）もの思ひをぞし給ふ」。『総覧』326-327 頁。 ⑤「御方々を過ぎ」の語法は、『総覧』314 頁参照。 ⑥原文「御前渡り」は「前渡り」に御が付いたもの。「今日もこの蔀の前渡りし給ふ」（夕顔） ⑦原文「さしこめ」。「戸を固く閉ざし」とも解せる。

(帝は)ますます不憫だと御覧になって、後涼殿に、以前からお仕え申し上げていらっしゃる更衣<sup>⑧</sup>の部屋を、他に移させなさって、(桐壺更衣に)上局として下さる。その(他に移された更衣の)恨みはいつそう晴らしようがない。この御子が三歳におなりになる年に、御袴着の儀式を、第一皇子がお召しになったのに<sup>⑨</sup>劣らないくらい<sup>⑩</sup>、(帝は)内蔵寮、納殿の物を充分に使って、盛大になさる。それにつけても、世間の非難ばかりが多いが、この御子がしだいに成長なさって行くお顔だち、お気立てが<sup>⑪</sup>、めったにないほど素晴らしいとまで<sup>⑫</sup>見えなさるので、物の道理をわきまえていらっしゃる方は、(弟宮の特別扱いを)ねたみ通すことがお出来にならず<sup>⑬</sup>、このような人もこの世に生まれていらっしゃるものなのだったと、あきれほど目を見張っていらっしゃる。この年の夏に、御息所(=桐壺更衣)はふとした病を患って<sup>⑭</sup>、(宮中から実家に)下がろうとなさるのを、(帝は)暇をまったくお許しにならない。この数年来、いつも病気がちになっていらっしゃるの

(注) ⑧「この更衣誰ともなし」(細流抄) ⑨「奉りしに=着給ひしに」。河内本は後者に作る。 ⑩原文「劣らず」は「いみじうせさせ給ふ」に係る。 ⑪原文「御かたち、心ばへ」。双方に「御」が及ぶ(『総覧』614頁)。 ⑫「めづらしきまで=めづらしとまで」。『総覧』535頁。 ⑬北山谿太氏は、「南面におろして、母君も、とみにえものものたまはず。」(桐壺)の例を示して、ここも「ものの心知り給ふ人は」が「えそねみあへ給はず」と「目をおどろかし給ふ」の両方の主語であるとされた(『源氏物語の新研究 桐壺篇』『源氏物語の新解釈』)。従いたい(なお、古典文の主語の位置については『総覧』368-369頁も参照)。「えそねみあへ給はず」は、「それにつけても、世のそしりのみ多かれど」を受けるもので、「桐壺更衣を」ではない。 ⑭原文「はかなき心地にわづらひて」。諸注こう解すが、「魂も消え入るかのような心地に患って」とも解される。

で<sup>⑮</sup>、(帝は) 見慣れなさって<sup>⑯</sup>、「やはりしばらく様子を見なさい」とばかりおっしゃるうちに、日に日に重くなりなさって、ただ五、六日のうちに、ひどく衰弱してくるので、母君は涙ながらに帝に奏上して、(娘を) 下からせ申し上げなさる。このような時にも、とんでもない恥を受けては困ると、用心して、御子を(宮中に) お残し申し上げて、人目を忍んでお出になる<sup>⑰</sup>。決まりがあるので、そうばかり留めることがおできにならず、見送ることさえおできにならない<sup>⑱</sup>心もとなさを、言いようもなく思わずにはいらっしゃれない<sup>⑲</sup>。たいそう照り輝くような様子でかわいらしい様子の人が<sup>⑳</sup>、ひどく面痩せて、たいそう悲しいと物思いに沈みながら、言葉に出してはつきりと(帝に) 申し上げることもせず、生死もわからないほど絶え入っていらっしゃれるのを(帝は) 御覧になると、過去も未来も考えることがおできにならず、色々なことを、泣きながら言葉に出して約束なさるけれど<sup>㉑</sup>、(桐壺更衣は) お返事も申し上げることがおできになれず、まなざしなどもとてもだるそうで、常よりいっそうなよなよと、意識もないような様子で臥しているので、(帝は) どうしたらよいだろうかと<sup>㉒</sup>、

(注) ⑮「つねのあつしきになり給へれば＝つねにあつしくなり給へれば」 ⑯「御目馴れて＝目馴れ給ひて」 ⑰原文「出で給ふ」。諸本に異同はないようだが、「まかで給ふ」とありたい。 ⑱「御覧じだに送らぬ＝え見送り給ひだにせぬ」。「ず」だけで「え…ず」の意を表すことは『総覧』108頁参照。 ⑲原文「思さる」の「る」は自発。新全集の「言いようもなくおぼしめす。」のような訳では、自発が訳されていない。 ⑳原文「人の」は「ものし給ふを」に係る。 ㉑「契りのたまはすれど＝言に出でて契り給へど」。『総覧』62頁。 ㉒「いかさまにか[せむ]と」